

一緒にがんばる 復興の助っ人たち ⑮

ニュースから流れてくる東日本大地震の被災状況はあまりにも強烈だった。「自分にも何かできる支援があるはず」と、東京都が設置したボランティアセンターに登録。アルバイトを辞めて23年4月上旬に気仙沼入りした。

「慎重に考える時間必要」

NPO法人ジャパン・プラットフォーム

佐藤 大地さん (25)

がれき撤去などのボランティアを続けているうち、被災地

とを知り、志願した。まず取り組んだの

各団体に声掛けして、6月に「気仙沼

が、ボランティア同士が情報共有するためのネットワークづくり。「ボランティアが頻繁に訪れる避難所や仮設住宅がある一方で、まったく支援の手がさしのべられないところがあった。その差を解消することなどが当初の目的」だった

「仮設住宅の暑さは本部で、今後発生が予想される南海トラフ、都市直下など大災害の減災対策などを考える。「震災復興は遅れていると言われる。確かにスピードは求められるが、早さだけを求めているのか。将来のまちづくりに関わる分野などは、慎重に考える時間も必要だ」と思います」。復興を成し遂げた気仙沼の姿を楽しみにしている。

感謝の言葉

気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンター・鈴木美紀センター長

明るく周囲の人をなごませ、自分の意見もしっかり伝える。つながりを絶やさず、東京に戻っても気仙沼の復興を応援してほしい。

毎週金曜日に掲載



東京都葛飾区柴又出身。駒沢大学経営学部卒業。震災後にNPO法人ジャパン・プラットフォームに勤務し、一関市千厩町に在住しながら支援を続ける。

寒さ対策などのノウハウを持つ団体が、他の団体に教えるなど、効率的な支援につながったと思います。私たちが仮設住宅などを回って聞き取った住民の声を、行政側に伝えられる場所にもなりました」と振り返る。

来月中旬に気仙沼を離れる。これから